1 英語を「使う」とは

英語教育の改善が言われて久しいですが、私達日本人が「英語を使う」機会とは、どんな時でしょう。一部の海外旅行や留学を除き、実社会では、そのほとんどが経済的、政治的、学術的折衝の場だということに気づくでしょう。そして、国際会議の大部分は英語を使い、基本的に英語を母国語とする文化の枠組み（ルール）に従って会議そのものが成り立っています。そういった経済、学術、政治等の国際会議および折衝の場での日本人の対応の貧弱さは多くの経済人や学者によって指摘され、報告されていますが、それらが「英語運用能力の低さ」だけに起因しているのではないと思われます。そして、英語の能力以外にも、日本人特有の文化や慣習の中に理由があると考えられます。次の三氏のお言葉を借りて具体的に考えてみましょう。

在米22年、元MIGA（世界銀行傘下の多数国間投資保証機関）の長官を勤めていた、国際的経済人の寺澤芳男氏（1997）は著書『英語オンチが国を亡ぼす』に次のように記しておられます。

> 「英語ができない、というのは残念ながら政治家だけに限らない。財界人も、学者も、新聞社や通信社の特派員も英語ができないのだ。（中略）日本のリーダーは、英語が話せないゆえに、国際交渉の舞台で自己主張もできず、外国のトップとの心のふれあいもできず、国民の声の代弁もできない。このままいけば、やっぱり日本は変な国だ、ルールも違うし、ざっくばらんに話し合う機会もないし、心のふれあいもない。いつも同じ顔をし、何を考えているか分からない、と思われても仕方がない。しかしこれでは世界の仲間にも入れてもらえず、孤立し、競争にも負けてしまう」（pp.52-62）

また、臨床心理学者の河合隼雄氏（1995）は『日本人とアイデンティティ』の中で国際社会における日本人の自我を次のように記しておられます。

> 「欧米人が「個」として確立された自我をもつのに対して、日本人の自我――それは西洋流に言えば「自我」とも呼べないだろう――は、常に自他との相互的関連のなかに存在し、「個」として確立されたものではない、ということであった。（中略）日本の学者と話していると、いろいろなことはよく知っているのだが、自分自身の意見を言わないのでおもしろくない、と言った人もある。あなたの意見はと言われると、まず周囲のことを気にする日本人の傾向は、欧米人に言わせると「自我がない」とまで極論したくなるほどなのである」（p.23）

国際捕鯨委員会の日本政府代表のアドバイザーでもある文化人類学者、高橋順一氏（1991）は、国際的な会議における日本人のコミュニケーションの持つ問題を考慮した結果について『異文化へのストラテジー 12章 国際会議にみる日本人の異文化交渉』の中

で述べていらっしゃいます。そのいくつかを抜粋させていただきました。

> 「日本人は言語を使用する場合、語のもつ厳密な意味（literal meaning）よりも発話者の意図（intended meaning）のほうを重視するという傾向が強いようであるが、これは議事録中の用語の選択にそれほど細かく執着しないという態度に結びつきやすい。その結果、議事録の中に有利な記録が残らない」

> 「国際会議のような多者間交渉では、交渉相手に自らの意思を示す二者間交渉とは違って、自らの立場を普遍的妥当性を持つような形で、第三者をも説得しなければならないが、その多者間交渉技術の活用が不十分であるためにうまく適用できない」

> 「自国代表団内の集団秩序維持のために多くの労力が使われ、個々の団員の自由な行動を阻害する要因になっている。そのためインフォーマルな形で意見を交わし情報の交換を行なう議場外活動が効果的にできない」

英語が公用語になり、国際会議の運営が英語圏の文化に基づいている現状を踏まえて、私達日本人は国際的に、より有利に活動し、無駄な誤解を避けるためにも、英語の運用能力をはじめ、大きな意味での「国際コミュニケーション能力」を身に付けていかなければいけません。

コミュニケーション能力の重要性を訴えている論文や書籍はたくさん目にします。しかしながら、そのコミュニケーション能力とは何か、その能力はどういった学習活動から育つのかを具体的に書いたものはなかなか見つからないのが現状です。従って、その解釈もさまざまで、それが英語教育の失敗に終わっている原因の一つになっているのではないかと思います。

その「コミュニケーション行動」に欠くことのできない要素として、高橋純平氏（1994）は次の3点を挙げています。

1. コミュニケーション行動の主体（送り手と受け手）としてのひとり、または複数の人間（これには集団・組織を含む）
2. 送り手から受け手へと伝えられるメッセージとその内容を構成するシンボル
3. メッセージを伝達する手段（メディア）　高橋純平・藤田綾子編『コミュニケーションとこれからの社会』（p.8）

また、社会言語学者の三浦清進氏（1991）は、『異文化へのストラテジー』の中でコミュニケーション能力を次のように定義しています。

> 会話は話し手と聞き手の協同作業であることを前提にして進行し、発展していくものであることはすでにみた。そうなると、ただたんに文法知識のみでは協力的な会話は

> 望めない。相手の知識や感情にも十分な配慮を払いながら誤解が生じないように言語表現に工夫をこらし、自分の目的を達成するために適確なコミュニケーション行動をとる能力が必要となってくる。この能力を一般に「コミュニケーション能力」とよんでいる。(p.116)

国際会議において、日本人の参加者を表現するのに“Three Ss”というのがあります。「沈黙」(silence)、「居眠り」(sleep)、「微笑」(smile)です。意見を持たないので沈黙し、そのうちに眠ってしまう。相手の言っていることが理解できず、また、理解できないという意思表示もできずにただ微笑んでその場をやりすごそうとする。コミュニケーションとは程遠い日本人の態度が的確にあらわされています。

その一方では、大学で日本語を選択する外国の学生が増えています。日本語検定試験の受験者も年々増加し、その成績も上がっています。彼らは母国語によるコミュニケーション能力がしっかりしている場合が多く、公的な場で意見を述べたり、話し合ったり、理論的に話すことができるのです。彼らが日本語を使って私達日本人とコミュニケーションを持つとき、私達日本人がたとえ母国語であったとしても彼らと対等に理論的なコミュニケーションができるかは疑問です。

J.V.ネウストプニー氏は「日本人はコミュニケートができないから英語ができないのだ」と主張しています。つまり、日本人の英語ができないのは、英語の能力が低いのではなく、コミュニケーション能力が低いためだというのです。

井上善夫氏(1994)は、『コミュニケーションとこれからの社会』の中で次のように述べています。

> 「もはや「あいまいさは美徳」では通用しない、国際化時代を自覚するときがきているのである。もちろん、人間関係の面での日本的なあいまいさの美徳を否定するものではないが、少なくとも、これからは、仲間うちのことばと、公的な場面で自分の考えた情報を的確に伝達できる論理的な話しことばを身につけ、場面に合わせて使いわける必要がある」(pp.146-147)

また、井上氏は、「大勢の人の前で話すスピーチ」や「上手な話し方」ではなく、「自分のことばで、話の場面の公私度に合わせて、意図する内容を聞き手に的確に伝えられる話しことば」をパブリック・スピーキング(public speaking)と定義づけ、日本人はその能力を身につけることを急ぐ必要があると述べています。

しかし、残念ながら日本の学校教育において、英語科だけではなく国語科でも、このパブリック・スピーキングの学習はありません。いわゆる「話す」学習だけではなく、「話す」

内容を自分の中でまとめる学習も、極端に言えば自分の考えを持つ学習も実践されていないのです。

ここに、霜崎實氏（1997）が『コミュニケーションとしての英語教育論』の中でコミュニケーション能力と日本の英語教育との差をわかりやすく著した文章があります。

> 従来の英語教育における理想的な学習者を一言で表現するならば、いわゆる英語の「できる」学習者と言ってよいだろう。ここで、その典型として「英語大好き少年」に登場してもらうことにしよう。彼は、英語そのものが大好きになってしまった少年である。英語に関することならば何にでも興味を持つ。英語の文法事項にも精通しているし、発音に関してもほとんど英語の母語話者のそれと区別がつかないほどである。英語で書かれた文章も正確に読みこなす能力を持ち、もちろん英語の成績は常に優秀である。こうした英語学習者がいるとすれば、教師にとっては理想的な学習者だと言ってよいだろう。しかし、こうした学習者像はこれまでの英語教育の枠組みのなかで作られた理想像であって、視点を変えてみると必ずしも理想像とは言えなくなる。
>
> ここで、ひとつのメタファーを導入することにしよう。言語のコミュニケーション機能に注目すると、言語は思考・概念・感情などを盛り込むための「袋」（あるいは「容器」）として見立てることができる。英語大好き少年は、いわば袋が大好きになってしまったことになる。確かに、袋を立派にすることには、それなりの意味はある。私たちは、言語を通してものを考え、思考の糸を紡ぐ。あまり目の荒い袋では細かい内容は漏れてしまうし、弱い材質の袋では使用に耐えない。しっかりした、しかも目の詰んだ袋を作ることは、その意味で大切なことではある。しかし、どんなに立派な袋を持っていても、所詮それは袋でしかない。袋に入れるべき「中味」がないことには、袋本来の機能は果たせないことになる。
>
> 「第2章　磁界発生装置としての英語教育」（p.144）より

この章の冒頭で、敢えて英語教育界ではなく、経済学者の寺澤氏、臨床心理学者の河合氏、国際捕鯨委員会の日本政府代表アドバイザーである高橋氏という、国際的に活躍している方々のお言葉を紹介させていただいたのは、国際的な視線から「英語を使う」ということをもう一度考え直す必要があるからです。グローバル化が進むにつれて、生徒のほとんどが同じ民族である日本の英語授業の視点だけでは、英語教育全体を捉えきれなくなってきました。

自分の考えを持ち、それを自分の言葉で表現し、聞き手に理解させる能力、または聞き手を説得する能力が、今までの英語教育には含まれていませんでした。今後は、このような能力が英語教育の中で重要視されなければならないことが、理解できたのではないでしょうか。